

佐伯史談

第五十二号

郷土史研究誌
通算第七十四号

昭和四十四年五月廿三日

佐伯史談会

事務局 法潤市大字稻垣寺龍護寺羽柴方

随想

移りゆく世のすがた

— 古い時代の庶民の生活を求める —

会員 羽 柴 弘

日にお茶山頂とてやす初興 素堂

若葉の五月と只女つた。城山頂上の城址の樹々は、既にかなり濃い緑となり、城址以外の城山の殆んどは雑木とすの樹林であるので、全山うすく赤茶けた若葉のよそおいを次々とすそびている。

断と歩けばおもむきは異なり、もろくの樹々は街路にそってそれらのよそおいと示し、手を挙ぐればその若葉にふれることも出来そうに、まことに身近かにあり、連日の晴天、さんさんと降りそそぐような五月の太陽の下、既にそよいでその清新な小枝や葉を動かし、初夏の気かみちみちている。時折パンパンと匂うて来る芳香、足もとを仰いで見ると、隣の隣の蜜柑が花を閉じている。城下町のか味、町、道を歩けば到るところで満喫出来る初夏の風景である。

農村世帯はとてあろいか。目下は黄城の最中である。こねから支刈り、蚕の上簇、田植と農家は俄然忙しくなる。若葉の山道にはあちこちに薫る花の重たげな花房が見え打るが、農家の人々日々かまうてお代ない。娘さんたちを肩にして、つばの衣いま新しい経木の帽子で日焼をさけつゝ茶摘みである。今、ス農歌を聴え、彼屋の前に臨時に構えた大釜で、御年配のおばさん達がせつせつお茶をもんでい

る。農家といえは、昔ながらの昔風ぶき屋根の家は殆んどなくなり、山麓に行けば行くほど新築枝やスチールサツシで改定された家が多くなり、その彼屋にはきま

本号内容

- 一 遷移 移りゆく世のすがた(羽柴弘)……………一
- 二 遊歴 毛利高政と石川康長(佐藤豊)……………三
- 三 随想 佐伯跡に於ける(眞宗歩)……………九
- 四 書誌 続信濃物語(山本保)……………三
- 五 寺詣 妙法蓮華を祀る左馬(齊生欽仙)……………五
- 六 研究 佐伯の城址と女勳(市野廣仁)……………六
- 七 雑記 文化後研究の旅をへて(佐藤重雄)……………七
- 八 探訪 大分市探訪地区をめぐる(河野共)……………三
- 九 見聞 大分市探訪の歩跡と(伊藤神宮宮物屋見学記(原本宗正)……………五
- 十 随想 直川子軍 徳川家水七(羽柴弘)……………一
- 十一 資料 横川八景、研修記(藤原寺)……………一
- 十二 研究会 研究会、研究会、研究会……………一

て、其若輩も殿殿が有り、そしてピカノ、自家用車か
でんと構えている。然しまた本瓦葺、漆喰の主廬、その
様により、そのように大きな瓦葺の御座、それに白壁の土
蔵といつた構えの、典型的な日本農家が立ちこちにあ
る。そして更にその古いところでは、百年も百五十年
も前に建てられた昔の姿のまゝの藁葺、瓦葺（かあまじ）
の農家もまゝではない、番匠川入段と高島と青山と奥
黒沢に一軒づつ残っている。よそにはまた多いらしいが
佐伯界限では珍らしい存在で、まじりあがては旧時代
の農家として文化財に指定されずであらう。

村を歩くと路は古にお地藏さんや庚申塔がやたらと多
い。時折は拜む人があると思えて花があげられている。
しかし地藏講や庚申待の風習は今はもう殆んどなくなり、
長い間農耕の疲れた生活も支えて来た民俗行事、例えは神
社の祭礼やそれに伴う民俗芸能、それ以外も庵キス近く
にあるお大師堂や薬師堂や不動堂などの縁日行事も接待
など、追々さびれて影がうすくなつていくことはまこと
におおしい。

村々へ庵は無住——庵主さん不在と云ふか多くなり、
佐伯四町八十八か所巡拜のお遍路さんの群は、殆んど見
かけなくなつた。

このようにに農家の信仰生活は、今日オカーやテレビで
象徴される華やかさ日常生活の片隅に押しやられてしま
つてゐる。左祖先をまつる墓だけは立派なものになり
つつある。

十方エニ十方エ、あるいははもつとかけて、まるで小サ
な城郭のようにコンクリートで築かれ、ピカノ、に女がま
あけを大理石の墓と仰いで見ると、きまつて「何々家累
代の墓」と肉々に深々と達意で彫りこまれてある。そし
てそれが林立して、まるで大都市インビル街のようであ

る。都会ではこれが止むを得ないことでもあらう。然し
田舎はちがう。左にいては南向の小立の丘の上か小山の
中腹、腰の下に部落や田圃が一望出来る展望のよいところ。
昔ながらの小さな墓が立ち並んで並んでいる。こんな
ところはいつまでか安らかに水眠出来る人は仕合あせて
あると思ふ。然し時勢は容赦してくれない。こゝにも家
勢が墓がきらびやかで建てられてゆく。

村の入口の道は左に庚申塔の一群が建っている。中央
に青面金剛のいかめしい六臂のお姿、上に日月を配し足
は邪鬼をふまえ、左右に雞をして台座に三徳、といつた
型通りのものから左に文字を付けて「庚申塔」と彫られた
ものに至るまで各種各様で、概して技法は稚拙ではある
が、農家の素朴な信仰を物語っている。

昔は、この村でも庚申待としていたが、今残っているの
は青山と奥、弥生村の根取の一部、丹匠村は宇津々だけ
ではあるまいか。

農村社会でこれら祭りが盛んに守られていくよき時
代も、衰かえせば藩政時代の封建制度による芽殺し求の
下に、農民はかゝるなべて貧困の中に苦しい生活をつづけ
ていた時代であつた。何はかいても生てゆく左にこの
秋の豊かさを徳と望んで一ぱい、されば苗代、こ
ろかへはしまり天候晴明、風雨時に賑かい、台風や夜虫
害の息災を求め、又一面わが身家内の安全繁昌と天下泰
平を願つたもので、こゝろは又権威を以てせまる圧
政に對する一つの消極的な反抗であり、或は又五人組の
制度などによるがんにがら外にきまつけられていた農村
社会のきびしい束縛の中からの、しばしの逃避ではな
かつたか。「稗の細道」から一句を引いて筆を措こう。

あらたふと青葉が葉の日の光
芭蕉